



TITLE:

[研究報告1] その王は都市でつくられた --カメルーンのバミレケ首長制社会と都市エリート--

AUTHOR(S):

平野(野元), 美佐

CITATION:

平野(野元), 美佐. [研究報告1] その王は都市でつくられた --カメルーンのバミレケ首長制社会と都市エリート--. CIAS discussion paper No.50 : 世界のジャスティス --地域の揺らぎが未来を照らす-- 2015, 50: 5-11

ISSUE DATE:

2015-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228628>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

その王は都市でつくられた

ーカメルーンのバミレケ首長制社会と都市エリートー

平野（野元）美佐

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・アフリカ地域研究資料センター・准教授

1. はじめに

本発表では、アフリカ中西部に位置するカメルーン共和国の首長制社会の話をさせていただきます。カメルーンは、アフリカ大陸のくびれたところにあります（図1）。カメルーンは共和国で、選挙で選ばれた大統領がいますが、各地に「王国」も存在し、世襲の「王様」がいます。たとえば、カメルーン北部地域は、かつてあったイスラーム帝国の領域で、現在もイスラーム王国がいくつか残り、それぞれにラミドと呼ばれる王様がいます。北部地域と並んで王様の多いもう一つの地域が、今日の話の舞台となる西部州です。

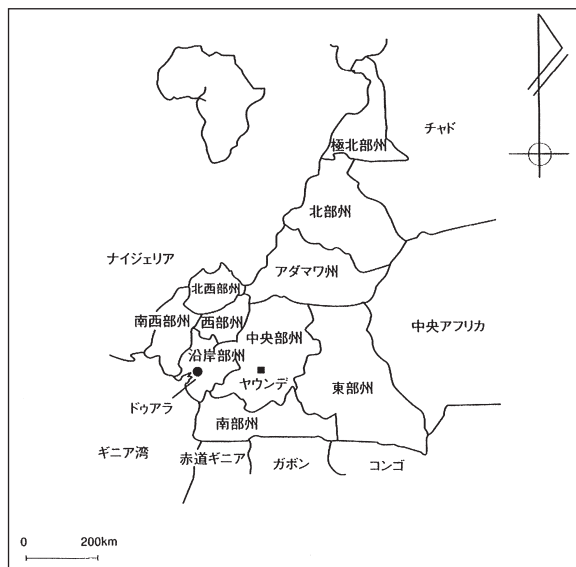


図1 カメルーン共和国

カメルーンは、カンガルーが東を向いているような形をしています。その尾の下あたりに西部州があります。西部州の東半分は、バムン (Bamoun) 民族が主に暮らすバムン王国で、一人の王様 (スルタン) がいます。西半分は、バミレケ (Bamileke) 民族が主に暮らすバミレケ・ランドとなっています。こちらはバムンと違って、細分化された小さな王国に分かれています（図2）。

この100以上のそれぞれが国のようなもので、それぞれに Mfen、Fo、Fon などと呼ばれる王様がいます。バムン王国のように統一された国ではないため、バミレケ・ランドの国々は「チーフダム (chiefdom: 首長制社会)」と呼ばれることが多く、王様は「チーフ (chief: 首長)」と呼ばれることのほうが多いです。よって、発表でも首長制社会と首長という言葉を使います。

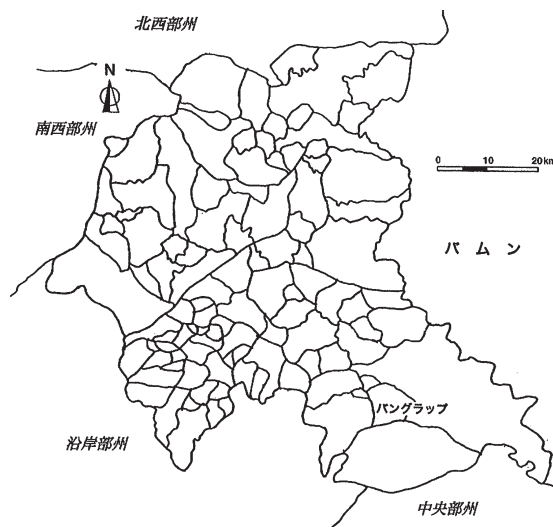


図2 バミレケ・ランドの首長制社会とバングラップの位置

バミレケの首長制社会一つ一つには、一人の首長、複数の下位首長、さまざまな位階の貴族や臣下、そして自由民がおり、ヒエラルキー化した社会を形成しています。かつて、バミレケの首長制社会同士は、互いに戦闘を行っていました。となりの首長制社会を征服して領土を広げ、戦争捕虜を奴隷にして売ることもありました。バミレケ・ランドの外にも敵がいました。例えばバムン王国は馬を使ってたびたびバミレケ・ランドに攻め込んでいました。この地域の争いは、20世紀初頭、植民地政府によって停止させられました。

バミレケ・ランド出身の人びとは、現在も、都市に移住しても、「自分は〇〇村 (首長制社会) の人間だ」というふうに、自分の出身の首長制社会

にアイデンティティを持っています。また、首長や貴族に対しても、その権力が形骸している部分があるにも関わらず、敬意が払われ続けています。

私が今日お話するのは、バミレケ首長制社会のなかでも、バングラップという名前の首長制社会についてです（図2）。とくに、バングラップ首長の代替わりについて、首長が死んでどのように次の首長が選ばれ、どのように新しい首長がつけられていったのか、都市との関わりに焦点をあててにお話しします。

バミレケ首長制社会で首長の死は、社会の重大な危機を引き起こします。というのも、バミレケの首長は単なる政治的長ではなく、神秘的な力を持つなど、精神的、「宗教的」長でもあるからです。首長が亡くなると、人びとは畑を鋤で耕すことが長期にわたって禁止されるなど、実際に首長制社会での生活に大きな影響があります。首長の不在は、共同体の基盤が揺るがせるのです（cf. Nomoto 2004）。このように話すと、バミレケの人びとが「伝統」に縛られているように聞こえるかもしれませんが、現在、都市はもちろん、村でも多くの人が携帯電話を持ち、衛星放送を見ている人も増えています。都市に出たバミレケの人びとは、村びと以上に多くの海外情報に触れ、タブレットやスマートフォンを使いこなしています。そういった私たちと同世代に生きている人たちが、首長やそれにまつわる伝統を守ろうとしているのです。ただ、その伝統の守り方というのは、昔と同じではありません。そこで今日考えたいのが、こういう「時代遅れ」にも見えるバミレケの首長制社会やその首長が、現在どのように「つくられ」、維持されているのかということです。

2. バングラップ首長制社会とクイカ首長

では、本日の話の主役の一人、クイカ・チャンバ・ジョゼフ首長の話をします。クイカ首長は1917年ごろに生まれ、フランス植民地時代の1931年、弱冠14歳で首長になりました。ですが、首長になったからの人生は波乱万丈でした。1934年には、この地域に入っていたプロテスタント教会と対立し、フランスの植民地政府により追放されてしまいます。1950年7月には首長の座に復帰しますが、カメルーン独立後の1964年、当時バミレケ・ランドで活発化していた急進的独立運動に関与した疑いで追放され、カメルーン政府により投獄されてしまいます。1987年に無罪となりましたが、クイカ

のバングラップ首長としての就任式は、ようやく1992年に行われています。14歳で若くして首長になってから、実に61年が過ぎていました。



写真 故クイカ首長（一番左）と臣下、貴族たち

名実ともにバングラップ首長になったクイカ首長は、10年余をバングラップ首長として過ごし、2004年1月5日に87歳で亡くなりました。しかしこのとき問題が起こりました。というのも、クイカ首長の後継ぎが決まっていなかったからです。クイカ首長は80歳代と高齢で、しかも2001年から病に伏せていたので、本来はクイカの死に備えられたはずでした。ではなぜ後継者が決定しないまま、クイカは亡くなったのでしょうか。

バミレケ首長の地位は世襲と決まっています。そうであれば、息子のなかから選ぶのだから簡単だろうと思われるかもしれませんが、しかし、バミレケの首長は一夫多妻で、奥さんが数十人いることも珍しくありません。クイカ首長も亡くなったとき、14人の奥さんが遺され、子供は120人ほどいました。その半分が男子だとして、60人も後継ぎ候補がいるわけです。

首長はふつう、亡くなるまでに後継ぎを決めます。先代は次の首長を密かに指名し、周りもそれとなく予想がつくのです。クイカ首長も生前、一人の息子を自分の後継者に選んでいたといわれています。その息子はクイカに似て背が高く、学歴の高いインテリで、カリスマ性もありました。周りの誰もが後継者として納得するような人物だったのです。しかし不幸にも、その息子は若くして事故で亡くなりました。そこでクイカ首長は仕方なく、別の息子を密かに後継者に決めました。しかし、その息子も亡くなってしまったのです。

アフリカでは、何の理由なく人は死にません。つまり、彼らは次期首長候補として嫉妬され、誰かに邪術をかけられた、つまり後継者争いで殺されたのではないかと考えられます。クイカ自身も

そのように考えたのだと思います。失意のクイカ首長は、自分が後継者を選ぶとその息子に危険が及ぶと考え、後継者を自ら選ぶことはやめたのです。これはバングラップの人びとが語る噂ですが、おそらくこのような事情から、首長の死後も後継者が決まっていなかったという事態になりました。

3. 都市エリートによる「新首長選考委員会」

さて、後継者が決まっていない場合、普通なら重要な役割をするのが9貴族と呼ばれる人たちです。9というのは、バミレケでは神秘的な力をもつ数とされています。彼らは、バングラップ首長制社会では、首長に次ぐ力をもつといわれ、行政的な役割を担ってきた人びとでもあります。彼らは普通クランの長でもあり、それぞれに自分のテリトリーと人びとを従えています。バングラップ首長制社会は首長のクランをはじめ、いくつかのクランとテリトリーに分かれています。それらの長が9貴族なのです。

9貴族は、伝統週の日1日に1度宮廷に集まり、クムシアと呼ばれる会合を持ちます。かつては、クムシアに向かう9貴族を見ることは一般の人にはタブーであり、みなその日は家から出なかったといわれています。今でもクムシアの日は休日で畑仕事は行わず、宮廷に向かう9貴族を見かけても声をかけてはいけないことになっています。

9貴族の力のみならず、彼らがこの土地の土着民であり、「よそ者」の首長がもたない力を持っているからでもあります。バングラップ首長制社会だけでなく、バミレケの初代首長はほかの土地から移ってきたよそ者である、という伝承があります。ほかの土地から来たよそ者が、土着の貴族(バングラップの場合はそれが9貴族)に認められて首長になり、首長制社会が出来たのです。よそ者であった首長は、その土地の最高権力者になりましたが、土着民ならではの力をもつのは9貴族なのです。こうしてバミレケ首長制社会は、土着の貴族が実質的な首長制社会の行政的役割を担い、首長の権力はある程度抑制されています。

バングラップにおいて、9貴族は影のキングメーカーであるともされ、首長が後継者を指名しないまま亡くなれば、後継者を決めるのは本来、9貴族です。しかし、今回クイカ首長の後継者の決定をめぐるのは、9貴族は中心的な活躍をしませんでした。というのも、後継者を選ぶために、都市のエリートを中心とした「新首長選考委員会」と

いう組織がつくられたからです。9貴族など有力な村の貴族もメンバーとなりましたが、中心となったのは都市エリートたち、具体的には、都市で成功して貴族の称号を首長からもらった「新貴族」、首長の家系出身の成功者たち、富裕なビジネスマン、国家公務員といった人たちでした。

バミレケ・ランドはもともと人口密度が高い土地で、植民地期には労働力のプールとして多くの労働者が村から引き出され、また一子相続であるために、多くの若者たちが自ら都市やプランテーション地域に出ていきました。そして彼らは、最初は肉体労働者として、次には貯めたお金で商売を始めるなど、「商売の民」といわれるまでになります。そのなかから成功者も多く出て、バミレケはカメルーンの経済を握る民族だといわれるようになります。その一方、カメルーンのユダヤ人などと陰口をいわれ、一般的に良いイメージをもたれていません。しかし都市人口からみれば、バミレケは首都ヤウンデで最も多いエスニックグループ、カメルーン最大の都市ドゥアラでもバミレケは多数派を占めています。村で相続できず、食べるために村を出た都市居住者たちと村に残った人びととの関係は、都市居住者が増え、成功者が出るにつれて、変わっていきました。現在は、都市居住者が村居住者よりも経済的にも社会的にも力を持ちつつあるのです。

クイカ首長の後継者選びに関わった都市エリートは、このように故郷バミレケ・ランドを出て都市で成功した人たちです。彼らが故郷に関わるのは、都市での成功を都市の同郷者コミュニティや故郷の人びとに承認してもらいたいからです。彼らはそのために、故郷に投資し、村に自分の家を建てたり、集会所や学校を作ったり、首長に何らかの貢ぎ物をします。また、故郷の首長制社会と関わることで、同郷のエリートたちやほかのバミレケ社会のエリート、または国家エリートたちとの人脈を培うことができます。

また首長制社会側も、そのような都市エリートを積極的に利用してきました。首長にとって、首長制社会の維持や宮廷の大家族を養うために、都市エリートに村にお金を流してもらうのは重要です。宮廷や首長制社会の運営には金がかかるのです。

現在、バミレケ首長制社会で当たり前になられることですが、バミレケの首長は、重要な貢献をしたエリートたちに、見返りとして貴族の称号を与えます。バミレケの貴族は本来世襲であり、称号授与はめったにないことでした。授与の理由も、「戦闘で手柄をあげた」などの理由でした。しかし

今や、金銭的に「貢献」すれば貴族になれるため、「称号の売買だ」と冷やかにみる人もいます。こういう都市の新貴族の存在は、9 貴族など村の貴族との間で軋轢をうんでいます。このような社会変化のなかで、バングラuppの新首長選考委員会は、都市エリートたちを中心に組織されたのです。

4. 新首長候補ヨンク

都市エリート中心の「新首長選考委員会」は、新首長の選考基準を3つつくりました。1つ目は、「宮廷で生まれていること」です。これは、生物学的にクイカ首長の息子であるかどうかだけではなく、その母が宮廷に嫁いでそこで産んだ子供であるか、という継承権の問題です。たとえば、首長になる前に生まれた子供たちは、生物学的に首長の子供であっても継承権はありません。2つ目は、中学卒業以上の学歴をもつことです。これは、カメルーンの公用語であるフランス語を話せ、読み書きができるということが含意されています。現在のバミレケ首長は、村にいて村びとだけ相手にしていればいいのではなく、都市や国家エリートなど、いろいろな人びとと渡り合う必要があり、そのためにはフランス語を含め、ある程度の教養が不可欠だからです。それから3番目ですが、年齢は40歳ぐらいまで、ということになりました。これ以上の年齢になると、すぐに亡くなる可能性もあるからです。

このような基準で新首長の選考が行われ、43歳のジャン＝マリー・ヨンクに白羽の矢が立ちました。ヨンクはバミレケ・ランドのある地方都市で、農業技師（公務員）として働いていました。小学校の教員をしている奥さんとの間に4人の子供がおり、公私ともに満足した生活を送っていたようです。そのため、彼はおそらく、首長になりたいとは思っていなかったでしょう。確かにバミレケの首長になると、人びとから尊敬され、衣食住にも事欠きません。エリートから高級車をもらったり、フランスなど海外旅行することも可能です。しかし行政の長とは異なり、首長は死ぬまでやめることはできませんし、基本的には首長制社会がある村に暮さなければなりません。さまざまな伝統的義務、役割があります。

今の生活に満足しているであろうヨンクが、喜んで次の首長になるとは考えなかった都市エリートは、策を練ります。まず、バングラupp出身の当時の農業大臣に頼み、ヨンクに電話をかけさせ、

首都のヤウンデまで呼び出します。地方公務員で農業技師のヨンクにとって、同郷とはいえ農業大臣から電話があったことは大変な驚きです。大臣から直々に、「仕事で頼みたいことがある」といわれたヨンクは、おそらく2、3日のつもりでヤウンデに出かけたのではないのでしょうか。しかしヨンクはそのまま、ヤウンデ在住のある貴族の家に「監禁」され、外部との接触も断られました。ヨンクはその家で選考委員会のメンバーから、「君は首長候補の1人となったから、血液検査を受けてほしい」と告げられます。その家の貴族によれば、実際にはヨンク以外の候補者はいなかったけれど、彼のショックを和らげるためにそう言ったそうです。血液検査は、医者であるエリートの協力で行われましたが、これは実質 HIV の検査でした。ヨンクがもし HIV ポジティブであつたら首長にはなりません。これも新首長の隠れた条件の1つだったのです。この検査をパスした後、委員会のメンバーは、「新首長は君に決まった」とヨンクに告げました。彼はそれを聞いて黙っていたそうです。彼の心中はわかりませんが、断るのは実際には難しく、その事実を受け入れるしかなかったのです。そしてヨンクは、妻にも誰にも口外しない約束で、しばらくの滞在の後、家に戻されました。もしも新首長に選ばれたことが知れ渡ると、過去に死んだ兄弟たちのように、彼の身にも危険が迫るからです。

こうして、首長制社会の中心にいる人物の選択と説得は、都市エリートたちによって、宮廷から遠く離れたヤウンデという都市で行われたのです。つまり、ヨンクという新首長が最初につくられたのは、都市においてだったのです。

5. クイカ首長の葬儀

クイカ首長の死から2か月以上たち、ようやく葬儀の日がやってきました。首長の葬儀の場は、同時に新首長のお披露目の場でもあるため、新首長が決まらなと葬儀はできなかったのです。クイカ首長の葬儀は、2004年3月20日にバングラupp首長制社会の宮廷前広場で行われました。横断幕が作られ、テントが立ち並び、4000人以上が集まる盛大なものとなりました。州知事、県知事、国会議員、市長などの国家エリート、近隣の首長、全国の名士など650人が公式に招かれました。こういった国家エリートや名士を招いたのはもちろん、都市エリートたちです。先ほど述べたように、

このような故郷の行事において、国家エリートをはじめとする多くの国家的人脈を形成することが可能になるのです。招待客には、シャンパンやワインなどととも、豪華な食事が振る舞われました。このような費用も、都市エリートを中心にした、都市居住者からの寄付です。都市エリートたちは、新首長選考委員会のほかに「葬儀委員会」を組織し、この葬儀を取り仕切っていました。都市に暮らす彼らは、村と都市を頻繁に往復しながら、多大な労力を使って、この葬儀を企画、運営したのです。そこでは、9 貴族をはじめとする伝統的貴族の影は薄くなっていました。

葬儀に関わったのは、もちろんエリートたちだけではありません。たとえば、ヤウンデなど都市部には、バングラupp出身者でつくる相互扶助組織があります。このような組織のメンバーは、全員少なくとも1人3000フラン（約600円）を葬儀のために寄付することが義務付けられました。それ以外にもメンバーたちは、亡くなったクイカ首長の顔がプリントされた布地をつくり、それを買って葬儀のために服を仕立てました。村びとたちは、新首長のためのイニシエーション小屋を建てました。女性たちは、土壁のための泥をこね、男性たちは木やヤシの葉などを用いて家の骨格や屋根を作りました。これは村びと以外にも、葬儀のために来た都市から来た人びとも参加していました。人びとはこのイニシエーション小屋を作りながら、誰が新首長になるのかと心待ちにしていたのです。

葬儀は、クイカ首長の棺を中心に行われます。しかし、実際に首長は亡くなって2ヵ月が過ぎており、この棺は空なのです。しかもバミレケの首長は「体が熱いうちに」、つまり即座に埋葬しなければならない決まりがあり、クイカ首長も死後2時間以内に埋葬されたといわれています。しかし人びとは、その中に遺体があるかのように棺を扱います。

葬儀当日の朝、開始の時間にはすでに多くの人が広場に集まっています。並べられた椅子は足らず、立ち見も多く出ています。そのなかで、楽団の音楽とともにクイカ首長の棺が宮廷の中から登場し、やぐらの下の定位置におかれます。その周りを、首長の臣下たちが取り囲んで守ります。首長の棺が置かれた後、最も重要な招待客である州知事が車列を組んで登場し、州知事が着席したところで司会が開会宣言をします。司会役のエリートは、州知事をはじめとする招待客にフランス語で感謝の言葉を述べ、コーラスグループの讃美歌、牧師の説教が続きます。続いて、8名の演説が行

われました。内訳は、近隣の首長制社会の首長が3名と県知事1名、残り4名はバングラupp出身の都市エリートたちでした。村びとのなかにはフランス語を解さない人もいますが、州知事をはじめとするバングラupp以外の人たちのために、エリートたちのスピーチはすべてフランス語で行われました。

この一連のスピーチが終わり、蛍の光が演奏されるなか、棺が宮廷のなかへ帰っていきました。これによって、クイカ首長は政治的にも亡くなったことになります。そして最後に、新首長の披露が行われます。

6. 新首長の披露

この日のメイン・イベントともいえるのが、最後に待っている新首長の披露です。ここからは、バミレケ色の強い「伝統的」なやり方で行われます。クイカ首長の棺が宮廷内に消えてしばらくすると、遺族たちが列になって「嘆き」の踊りを始めます。その列は最終的には輪になるのですが、その列の先頭に「新首長を捕まえる」役の貴族が踊りながら進みます。この人が、観衆のなかに紛れているヨंकを見つけ出し、「捕まえる」のです。周りの人は、誰が新首長になるかを、その貴族が手を捕えた瞬間に知るわけです（ただしこのとき実際には、ヨंकが次の新首長ではないかという噂が流れていました）。

新首長誕生の瞬間はドラマチックなものです（その瞬間のビデオを上映）。ここからが、ヨंकをつかまえに行くシーンです。このストライプの服を着ている人が新首長を捕まえる人です。しかし私は、肝心の瞬間はうまく撮影できていません。というのも、そこにものすごい人が殺到したからです。ではなぜ、人びとはそこに殺到するのでしょうか。それは、バミレケ首長制社会ではこのときだけ、一般の人が首長に触ることができるからです。ふだん、人びとは首長に握手をすることも触ることもできません。しかし、新首長の誕生の瞬間だけは、誰もが首長に触ることができるのです。さらに、新首長を殴っても、物を投げつけてもよいともいわれます。これは、首長を神聖にする行為だといわれます。この日はあまりにも人が殺到し、ヨंकは危険を避けるためすぐに車に乗せられ、イニシエーション小屋へ向かいました。そのため、新首長の顔を見られた人はごくわずかということになってしまいました。

新首長を儀礼小屋に入れる役目をするのは、バングラップの初代首長と兄弟関係にあるとされる近隣首長制社会のバズーとバメナの2人の首長です。この2人が両脇を抱え、ヨンクをイニシエーション小屋に入れました。ヨンクはこれから9週間をこの小屋で過ごし、貴族からさまざまなイニシエーションを受けます。イニシエーション期間は首長としてはまだ不安定な時期です。近隣の首長制社会では、イニシエーション小屋で新首長が亡くなり、違う首長がとって代わった例もあるほどです。9週間のイニシエーション期間を乗り越えてはじめて、ヨンクは本当の首長となれるのです。

イニシエーション小屋では、9貴族をはじめ村の貴族たちが、首長にさまざまなことを教えていきます。この期間彼を守るのも、これらの貴族たちです。つまり、この小屋で重要な役割をするのは、葬儀が終われば都市に帰る都市エリートではなく、村に暮らす有力貴族たちです。ヨンクという首長を最初につくったのは都市エリートでも、彼を本当の首長にしたのは、村の貴族たちだったといえます。つまり、ヨンク新首長は両方の力がないと成立しなかったのです。

6. ヨンク首長のその後

現在のバミレケ首長制社会では、バングラップのように、都市エリートたちが新首長の選択に関わることは多いといわれています。また、首長自身が、都市出身者ということも増えています。たとえば、バングラップのあるンデ（Nde）県には13の首長制社会がありますが、13人の首長のうち首長になる前の居住地は、ヨンクが首長となった2004年時点で、1人を除き全員が都市でした。新首長の誕生に都市エリートが積極的に関わるだけでなく、まさに首長という中枢に都市居住者が入ってきたのです。

このように、バミレケ首長制社会というのは都市エリート、都市居住者なしには成り立たなくなっています。たとえば都市エリートのほうが、この現代にバミレケ首長制社会をどう維持し発展させるかを考えているのです。ですが、村のやり方を無視していいわけではありません。村でのイニシエーションを省略し、新首長がみなに首長と認められることはありません。新首長ヨンクが両方の力を必要としたように、村だけでも都市だけでも成り立たないのが、今のバミレケ首長制社会なのです。

ヨンク首長はあれからバングラップの首長に無事就任し、すでに10年の月日が流れています。彼の人生は劇的に変化しましたが、もともと結婚生活を送っていた妻と4人の子供をバングラップに連れて来ていました。妻は当時、4人目の子供を産んだばかりだったのです。彼女は教員生活もやめて、村に夫とともに移り住むことになりました。首長になる前の結婚であるため、彼女の地位は本来低く、彼女たちの子供には継承権がありません。さらに、自分の夫が多く若い女性と結婚していくのですから、つらいといえつらい立場です。しかし彼女はバングラップにおいて、自分の道を切り開いていました。小学校教師をしていた彼女は、村人に乞われる形で最初はボランティアで、現在は正規の教員としてバングラップの小学校で教えています。また、宮廷のなかの「首長の妻たち」が暮らす区域に家を建ててもらい、「正式な妻のように」暮らしているのです。また彼女は、首長となったヨンクとの間に、もう1人子供をもうけていました。このように、首長との夫婦関係は、形が変わっても維持されていたことになります。ヨンク首長にとっても、新しい環境のなかで彼女がそばにいてくれるのは、心強いものだったでしょう。

次に新妻の話です。儀礼小屋の9週間という長いイニシエーション期間は、実は子作りの時間でもあります。ヨンク首長が本当の首長と人びとから認められるのは、最初の子供が生まれてからなのです。また子供は多ければ多いほど良いと考えられるため、儀礼小屋にたくさんの新妻を入れ、早く子供をつくらせる必要があります。しかしその「伝統」は、現在、大変難しくなっています。というのも、今の若い女性のなかで、極端な一夫多妻のバミレケ首長の妻になりたいがる人が数が少ないからです。ヨンクの場合、都市エリートや村の貴族たちの奮闘もあり、少しずつですが妻は増え、現在（2014年）は6人の妻がおり、すでに子供は14人ぐらいになっています。実は、バミレケ首長の妻の出入りは多く、一生を宮廷で過ごす人もいれば、宮廷から離れていく人も多いのです。

最後に、ヨンク首長の首長制社会の改革を紹介したいと思います。彼は、首長に就任後、都市エリートたちの援助を受け、ヤウンデの専門学校で1年間農業の勉強をしました。これは、バングラップの農業を発展させたいという彼の希望からです。彼は村に戻ってから、現在も一農業技師として、近隣の都市に通勤し、働き続けています。また、自分の宮廷の畑でも精力的に仕事をしています。形は違ってしまったかもしれませんが、彼は首長

の仕事と連携させながら、農業技師としてのキャリアを今も継続しているのです。

以上、ご清聴ありがとうございました。

引用文献

Nomoto Misa 2004 "A Study of Nonverbal Communication in a Bamiléké Chiefdom, Cameroon", *Journal of Studies for the Integrated Text Science* (Graduate School of Letters Nagoya University: 21st Century COE Program), Vol.2 No.1: 137-147.